

## 日本と韓国のサッカーの歴史からみるスポーツの持つ「寛容さ」について

About "Generosity" of sports seen from the history of soccer of Japan and South Korea

1K05B164

指導教員

主査 石井昌幸先生

中村 千賀子

副査 寒川恒夫先生

この論文では、有史以来、地理的に最も近い関係にありながらも微妙な関係性を築き続けてきた日本と韓国という国を、サッカーの歴史と2002年FIFAワールドカップ日韓共催大会の経緯を追いながら、「文化」という切り口から注目し、社会におけるスポーツのあり方とスポーツのもつ個性について考察した。第一章では、日本と韓国のサッカーの歴史について考察を加えながら整理した。両国におけるサッカー伝来の歴史から、プロリーグ成立の歴史を取り上げた。その中でもとくに、日本が朝鮮半島を支配していた1910年から1945年までの歴史について詳しく述べている。第二章では、2002年に開催されるFIFAワールドカップ大会が日韓「共催」となった経緯を、時系列を追いながら詳しく見ている。日本と韓国がワールドカップ開催国として立候補する過程や招致合戦の様子などを参考資料や当時の新聞をもとに調べた。招致活動を中心的に行なっていた人物にも焦点をあて、二人の経歴と招致活動に対する態度など関連性を見出し考察した。第三章では、2002年に日本と韓国で共催されたワールドカップ大会が、サッカー界においてまた、既に存在している社会・文化に対してどんな影響を与えたのか調べた。その中でも、韓国で金大中政権以降政策としてなされてきた日本大衆文化の段階的開放について少し詳しく触れた。スポーツイベントという文化が、一国の政治にまで影響を与えた事象として注目をした。

このようなスポーツの歴史と史実をもとにスポーツについて、そして文化について考察を進めた。他の芸術文化と比べてみても、近代スポーツはサ

ッカーに限らず長い歴史を持っているということはいえない。歴史の長短で言えばスポーツは他の文化に劣る部分かもしれないが、スポーツも一つの文化として存在していることは確かである。他の文化と同じようにスポーツは人間によって営まれる文化のひとつであるということだ。多様な人間によって営まれているということをしっかり強調しておきたいと思う。

それはこの社会がすべて、その多様性をもつ人間によって組織され、運営されているからである。つまり、多様な人間によって扱われている対象も結果として多様な存在となるはずだということをしっかり分かっておきたい。スポーツは人間によって体系化され、洗練化され、発展を遂げてきた。しかし一方で、一部の人間によって社会から都合よく切り離され、本来なら発揮できたスポーツのもつ個性を埋没させられてきた。ただそれでも埋没させられてきたその個性は他の人間によって、埋没させた人間が予期していないところで再発掘される機会を得るようになってきているのである。一介の文化にすぎないスポーツが社会に対して、また他の文化に対してこれほど大きな影響を与えることができるというのはおおいに注目すべきところである。そのように他の文化と共鳴し合える部分があるということ、それこそが今後スポーツが発揮すべき個性ではないかと考える。その個性というのは次のように説明できる。スポーツはその存在がより根源的なもの(=あらゆる人間とかかわりをもてる可能性が高いということ)であるがゆえに、「寛容さ」という個性をもっているといえるのではないか。これほどまで社会や他の文化に対して影響

力を発揮できる文化が他にないということを、スポーツが「寛容さ」という個性をもっていることを、スポーツを営む人間がもっと自覚し活用していくことが必要ではないだろうか。

今まで、利己的にスポーツを運用してきた人間が、スポーツを社会とのかかわりの中で寛容さを発揮させて運用していくとき、スポーツがすでにもっている個性をさらに発揮していくことができる。